私長日記　中

ル 2
3115
2

船長日記中之巻

斯て日を送りしに何一ツ是といふ事もなくて物も丑寅へ

十四日斗り走り行けるに大きなる船一ツ見えたり其船の如き

一様に帆を下し彼船十四五艘も出張し構へたる者

二三人乗て来りつ迄其船に陸舵を取て皆々おりたるに其

まはりより逃出す東の方又北の方に見えたりかの彼舟は

おろし樽やうの者は又帆を巻て出けり

此彼舟は水中に住む獣の皮もて作りたる舟なり

長さ九尺計りもあるべし其上に穴ありて其穴へ人入れ

早稲田大學圖書
門 ル2
號 3115
巻 2
早稲田大學圖書館 昭和28.9.22 藏書

かさと操返なく云ひしくも寄せて水のめか
如船人ありしものゝ二人宛も三人宛もあり又大さ
形る枚子のさましきものをてゝ見るに係る漕返る
すり此湊ニハ數多く往來船の数多ありてよろし
寄るすり此舟ニハ又ハコーリヤカと云ふ不の者とて
然るに又子丑の方へ二里斗り去りて地方へ若く漕
と見しき不へ碇をおろし先長濱にハ若寄りと見て
嬉しくおもひより形くへケツ初七人打連て陸へ
よろすり二人の者へも先長濱へ若寄りしをと云ひ聞せ

右船返をおこし陸へしと云ふ急ぎ陸へ上かり八十四五人馬を
引よせ返不出ず皆此船の人を同じく衣服を若干
先ハ長濱ニ退出れ何も人あるへしと相尋ね爲さ
是ゝしたしく數ハ多さ相之襁帯ニ衆をまとふ然ハ
二角之板見玉人見ひて挨拶しく皆く馬に乗て奉行
宗達と云ふ者れと宗しかゝをうるまいるを引くことと云
とも通せと止事と思す宗ハ宗くれと馬二足も来て
ますされハ翁ハわりくへしとて仕方をしくて云ひなれと
居をし先帳宗達と云ふ仕方をしる所又ものさまて

あまたをもつて飛馬に乗て川岩尾をかけ畑をこえて小麦
穂に出てゐ毎色長濤ハ子て穂に出る所之と云ひつゝ一里
計りけりと向ひをこえ行ハ白髪の老夫の杖をつきつゝ
ハ安房ひとりおもひつゝ髪をしらし大手先と見えしさ
不に男女二人来り出迎ふ先の所立人も紫の袴の服と
若きり女ハ大かしこまりしきをまさかの後ろて袖ハ男
の袖をかりかしこまりて徳か下ハ僧の衣の裾を
ゆするさ有て張し当廣くりてこ柏所ハ切まて色之平
ままをたゆくくされへさまくして此かさりを飾まり金玉

見るに皆笑ひくおもえ巻く袖を日本の人ゑといふわけを
知所あまた物にそやあらく先きの所立人来りて玉
が衣のすそを悦く握りてあらく座敷の間にたくさ
れハ古き之無縁扶の相を出し動きりこあまた人と立
宿銭上銭に居てし先向ふハ又ふ人之見社おも座敷と
不不あまたに先来りて不へ訴ふく此法の衣ひ成へ住
云ひ張てり袖たくまた中へ暮を出しつくさ文し此
諸色出てり限法山をて出てあまた惣物多くハ白かね之
枚諸色まで皆て一同に知へ出て来りてたふなりけん

とふ事の外に似たる香ある花一面に咲こぼれていとうる
はしき花を摘て袖への移れハえもいはず薫れりさて
東に渉りける二人ハ迷ひを語らひ行に甚だ色
甚れ不の浴をのミ語りけれはおのつから不動夜十四五郎
もなく皆役人体の者ともより聞こしとく
歩行日本の人に逢ふ夕暮に至り皆く相逢ふて
独り二人の君と色陰にその身を語り咲せる日本
人は逢ハさりき是より東へ行き逢ひの
来たる事数通しと三人ともに安堵して休み侍り数夜

始めて後は彼の女へ尋り答へは庵一根の物を食ひ
つ於ても陰へ行き遊へありて米飯初食事採果く
又打連て西へ行て海辺を見渡せハ牛馬多く群居り
牛ハ四眼六足にして多く居るか其肉も足ハ殺して皮をとりて
ところうちに形ち木より小斧れかしらゆて牛れ
角れ身を打て殺し皮をとりて皮を見て是ハ長涛に
行た生ものに畜生道に落て有ると又惻隠の心発して
涙落る取るも彼殺したる牛に念仏を唱へて祈の中に
横たへるを見て二人とも歎しけり打て又馬を求めその

の中へ切て見世ハ門れぬ所ふ牛羊なとを飼おきし此
獣も京中數しらぬ程に其船に乗くる人
降りく後の人料理のために殺す事なり
何ことも絶ても
ありけふ之なり 我らく久て絶竟世すり拠そて不地球のつの 是ハ何ふの絶竟の所を害ふ之す者へし
爲とも見るく此国ハいろく数ありと聞中ハ此所ハヲロシヤの屬
國北アメリカ南アメリカの界まてへイハイスハンヤと云所も
赤道の下なり此者ふしらく日本とハ足食せの國すりとハ
救助英れし多船を取竟(かんぐ)まてなるく是も魯西亜(おろしや)の
屬(ぞく)国歐邏巴(やうろつぱ)の内諸入利(ぎりきす)亜の都ロンドンと云所の船ろて

國之二丈弱にて船之イキリスの國ハ西から北の船十二百艘
為人并六百艘あるとそ想ひしくイキリスの東北(きた)アメリカへ行
ろハ此所の切手をもたらしハの事叶ぬ國されハ急ぎ帰るへ
来る事之ろハ家為薪ありしけるへ物様と求めつくしける
なりとて
人ろハとふかくて此国ハ伊西把泥(いそでんや)亜国より後行
うりせさる西夜新イスハンヤといふ所へ之とそ立寄し暖国之
段世所の所立入の名を近サテカと云日本文化弐年ふ率
其乗妻ハ西十人女之一艘ふ子二十五人但男十八人女十四人一合

大ぞすこやかなりとて
由二人此病人も船中にてハ養生ならざるとて廿日テカの
並へ引移しくる介抱せしとて其者ハ舟中に居らく日々に
陸へ上りキテロの宅へ訪ひ見なとなし數多くこぼしてくれ
極寒に至十日程百斤薪水皆ハ行立し積の事一冬も過に
しく十一月中ふきも多く積の十一日船を出して出よく
夏く其の前をさしつく十一日走りけるに十二日の夜の寅の刻
計ふ大風烈敷吹起り浪高く海荒て終に揖折ける
其者船底に居てけしきを見つくしけるに小船も揖折
けく流れ船を放又其舟も揖折れけりされ共それにても余
のすき之又船中の人ハ揖折ける船人を余すなく
船の揖も折れてかるを拾ひて船を救さんも絶へて
かひなかりけれバ舟にても取付れしと救さんとせしにかか
海へ飛込て死せんとせしにかく揖へ上々上りて是ハ揖ハ折れても
かしこも岩見へけれバ船を泳きより此舟へ
揚りて分凡三十日ほども居ける是が伝馬の事也
たまたま心安くなり思ひし其処をとらへて酒なめとも
酒ものまれす

酒ハシユカ二升ほとりの木をもらん川ふしるを口ニ入といふ
クロハ大麦（の事）にて醸するをシートツカといふ玉にて作る
酒なり
ひる頃ゟ上らんとて也を落つりせんとする船頭へ六ツ銭
吹ささ文字を渦ひ抹して後ハ静かに落付けりとや
角を過ぎ舳に夜も明け風も止みけれバ船に大工揖を梶へ
獅子す文丹宮の方をまもりしく走り又十一日着り　船のもどり予留候ま
九百里余ハえしるなり　十一月同ふ湊へ入る家ハ川みすまき之岸ふ
納屋と並列すき板張にて大き成小屋一軒をのこして
砂ふ人家ハなし此の頃を住む異人ハ皆穴の中ふすみけり
其の上其穴居ハ私ふふ入ハ男女共赤裸にて下帯も
なし者を生ニて衣食に親子兄弟の差別なく人ふ
何の始もせぬ中を遠とも人ふ向て手でまねしとも人ハいつて
賑立けしきみを達ても何の訳ゟハ志ふ従投出して分ちもけり外
川上ふハ鉾を持大さ手する里にあり役人堀の人も住とそ外
湊へ船の入る時役人拝の人壱人ほかの人数二三十人も荷
つれ大きな川船にて来りて交易をすする頭取となりて守護
さ紀ふ難風ふ逢ける時それしける揖世のか眼きせんら

為に船をとゝめ〆之十四本を揃てわが手へやりたる桜木を
無事に横下し来りける二三十人も京へ申すも多人日本
の桐にて寒暑に向ひ奥州々杉などに風俗ハ異国
のさま多く更に眼の様子なかり日本人違ひハなしとなん
其されハ新羅国の姿男を二重ましと唱へ 笑せてハそ
日本へ帰りし時に様に中より見えしハ成りしと
あふハそれぞれの国につまりく成ハひとさ居てさへ寄く無に
都にて掛てハ何とか不成なく何さけハ港にハオロシヤ
に従ふ玉ひて「ルキン」と云ふ所に亡きと云ふ ルキンハ北アメリカなり 相違なしハ
日本までも行玉へ渡とは人なかりし外にも此者流されきてと
之ろ人もやあかすて同じ唐人の家もて日本の人ゆへにハなし
とて名のかきり書きハ是ハ程を云ひ多ハ赦へつかハ
来りもやうふんと今安て国とあかけ海ハ如何心得く
偽とて隠してとも日本人に頼れかし たゞとむりき
の人までも我達て海ふんまどてハ御使者に海ろゝて
付添へといひふ船の難義りしこそほれ行れりた
迷を渡なそとも思りて見たりれハ如何やとも家を送し
此様なへりて日本の国と思んへなるんと云とや聞き

る様に一同に舟を浮せてそりける
是ハ此私り米きろ人足
許の者成れハ北学の勢る
乱れきりうして
のりゆきうるなり
物の舳をつくろふ、程三十日斗此所
に居て又々私を切して、文ハ大小をさして四十日斗り
のほる四十日めに船底々不残矢十一挺を切り、陽の其物紙
のまの上に出ると、漸々とに東薬を居き紙を入るまで
を匙の者ハく旦薬の沈々大むしの舳欲物を実破り
仕かけ用意をして其外鉄の玉も能く切る、玉私の方
へハ幕を張りて私乃畜にかへらぬ様に仕をして外へ小
遠を付ける鉄砲四十二挺を切り、是ハ玉を込めたる時ハ撞き

て半小廻りとて帝者に乃様を見て以てかとろうき、是ハ
軍に来りる紅毛あらく交ひきその事を同じかんとも
是を見きくて夜詰をとて軍に来て、来りける紅是
いかなるきわめをぞ見んとおもひて文に学し学びられ
見に是ハヲロシヤ丸属玉ヘハイトシヘイニシニ支玉の為の海
と百里斗り此海を通るに此二玉人ハ軍動て到活
人を会に出なり私の出るをされハ出して乱暴をして横に
る荷物を奪取する事何事ハ嫁りありしてに是ひ
を婦く為に都ハあし法る之

此二国ハヲロシヤ北続する地にハ又人とも異人の風俗あく
甚荒く浅ましく今ニ至りてヲロシヤ北西の風ニハ
移られ髪をつゞし顔ハ一面ニ稲の物ニて赤く染り
手に鐵ツも輪をさげて居る女ハ口の中ニ物を含
ひたきりて唇を張出して居る之様ニ至ても浅き者夫
婦と成りて己が子ニ不叶ひたる婦人ハ鐵人も毒とす
し死人の肉を食ひ迎玉又罪人の殺されし者あれハ
其の死骸を引来り切さきて煮たる之酒獄を
取く皮をさき国に持出湯或ハ塩漬抔と更易

を試ハ湊へ一毒毒を連来り船中へ酒ふるまひさらの
本諸切し抔して女房を一夜更易なとして
扨此所ある国の海の土ハ中を引て難有く迄り古ハ弁し拙
御ニアミシツカと云所此湊の入口ニ岩あり先ニ込いれ石
大矢の玉を出し縄の捕る物抔を集めて夫を込
入き玉ありの石大矢一ツ放ちより初めて石大矢の音を
咲家ハ驚きたり此声を陸から咲て橋舟ハ被小
十四五人ツゝ乗りく来りニ其ゝの船を廻へ湊のハ大船
ハ被くまく居たり其ハ肉五艘ハ魯西亜(おろしや)の船ニ来檣(ほばしら)之三艘を

メリケニの船ニてハ緩なしき湊ニて造舟杯して居るも
有ば有りに九人或ハ三十般も有奴原ニ役人命ぐれ
者ハ多し湊のよふ山城を光して天守杯ニ拠る
如く見へたりされどもヲロシヤの鉄玉アミミツカと云所之
ハアミミツカハ北アメリカの北ハ中にして北極七十度の正
当も両天の時の様ニて昼ハ何ほど斗ニて日も露れ
登りて拾数物をして定晴ても次は備ハ見る後月至
ても霧に見える也六月ニも雪降る初のイハイスハニ中分
七十日半過りたまハ凡七二十里余も有之しと先ハ漂

ひ居たる所ハ毛甲ふ毛ゑきる絶されしをむくハ六月ニ
首あるをして数千里隔りたるを知る居し
湊ニ入る人腔を一ッおろし又石火矢一ッ放のひ音を
来居たるハ艘の船毎まとめて出し此方の旗を立る
城よりも速に速すれハ又大ッ放ッを返し八艘の船毎く
帆柱ニ大ッ放ち終りたる時城中よりも又大ッ放ッ是ハ
漢の祝ひて祝義之とて慈すべしの船ニて祝之とて み
なとふにけ上へ船皆ニ酒盛杯して折ふしより 御年の正月
たとえありメリケニハ欧(ヤウ)遅(ロッ)巴(パ)の内ニてイキリスふときく所ニて云

来親しき友なりしの船頭左衛其外の乗組の人々も
メリケンの船へ一同に乗移りて酒もりをもよほし船主
同じく南京人六人ハ彼らが是ハ返詞の為に一艘にて乗入つて来らせ
来るとぞ扨酒宴も及んで南京ハ日本へ交易をする
事を通事ハ重吉に対面させんと云出しけるとて重吉を
呼ひに来りけり日本の衣服にて着替て来れといふ
久しくて日本の衣服を着されハ宜しく着へけり形てメリ
ケ二の乗へ切り合通事ハヘケツ云振南京人ハ日本と交易する
事故ハ呼よして見ますナと云て南京人を呼しけり

けし協至て衣服も異人チロシヤの人とハいはて風儀整
りけり扨南京人ハ日本に交易に来るとハ必及ひ飛さ
れとも詞通せねハ是迄振しく郷しうしる事
なきを呼し通せ何卒して夜にハ語りけれし舷よとり
なりしかとも不言を協し振子を見ん飛てまる南京人に向ひ
今のハ何を云ふかなからそ問へと南京人ハ知らねと答へ是振
夫より扨六人の南京人共に重吉に接待を接するを見へ十分重
吉に向ひ何をいへハ明日をいふかとて向かれとも仰事よう
更に分らねハ是をしと答に何ハ文字の通ずる事なれハ

筆談に及ふへしと云ふま定まりて筆と硯を出しけるに出
さり言葉は通せ共筆談にても少しは日本の人なりてハ
備を云たり杯と思ひて数されやせん偽へ取込れやせん
杯思ひ返しては心苦しくひしかり先家に居たる者の
をもてなさんと思ひてさとうをもてなされ候通
まだ又菓子碗と出されとも称するぬさま之由にハたすなりせ
ましと思ひめぐらし今度ハ一二三と分かり近むかくとせられハ
是ハわかりけるかと思ひてアラヲイキリスの詞にてワン一
二テウ三スリー四ホツワ五ハイフ六セキス七セブン八エイト九ナイン十テンと云ハ
是ニと云て初て通じけれハさとりしやかりき皆々も
西おゝて猶も杯をめぐらしていて其人ニさするヲロシヤ
の人ニうさをうく人とも云かれハ打てヲロシヤ人ハ中に出て
かたりしと是指をふこてよくに皆々其ふして酒をのむ
此度ハイキリスへ参りけるに紙をさしてみれば一本ま古筆
ニ出しく是も赤き指を出してうかひてハ酒盛す今
度ハ南京人六人ハ同ニ出て唄ニ是ハいとしく口ニ言ひ
是も銘々に今度ハ筆を又とりて互と皆々云出けり
然此ケ様ニ此事ひ書て通ハ先如くなし其中ハ出て立ハ

これと宗これいをいで行て居るとに何ゆへとれこ思ひまで
て居るゆ面れハうる杯飄に句にハ我からし壱申へ出さうま
て果しこと我後も云うて杯くのうまひこといひ唐人と
に若ハ杯をし情なきくものこからる異国にさまずいひ味て
那もと顔麹をして色をと痛め果しこて居るものもと
色にり慰こ物てして酒をのまんとハさりとて八情けなう
杯勿さ口の中にてつぶやきゝりし云ひつゝて怪り
さいゆまり不淺くこいやし數も云うて初されハ身まて全て
うさを喚にとさ云ひ多人皆々一同に與ハまめ夢と何事て

やんやしと誉る杯の事しきこ云れハ又おうしくも我さり
扱酒盛を終りて船へ帰り休こる所へ又何所ものより
ケニ船へつとひ集る中に申て言語ようし云ひ色にす
又又何すも哀を連りまニ知りされ党ハ我を慰こ物
ますることハあり返店をたゞうらみんとて船中にて唄ひ
人くれ者つとひて楽しむすりされハ壱吉中ニ落杯
ハ連りす家を船頭とて云ふてしていさゝむひけりされハ六月ま
去鉢出返来りても同しの哀後さへ患まれ會せ云ひも
せぬハひへケツの惠之これハ余の観之とと云ひ恐しててす

も又唄とうたへと云りいまにこれにても利用ずしてもうたふに
舞しと云ひに作りて扱足りて数くまゝしくメリヤスに
無人いさあひ出かれたり歌してそのふのさ夜ふて酒宴人
たしまり果して又皆しうたをうたひ宝吉ろも出て
宗へと云ふことは幻を云ひ出しされは昔しとも忘れいて
これにても唄ちんと云ひ笑ひあふうてひかりされは皆を
大きに様立て来ふはいかられは歌うたを囃嗅するに
此頃に唄うしらて唄人と云黒(のし)りあれは室吉文様立
来りてそのふは嫌しらて唄ふ心もあきを淀てうたへと

云今のは又うたちんと云これは又とやりて云ひしく歌を
昔しむかしよりかへ歌しも唐人は心なき物之とちんは恨
めしく数く又皆しのこすを抑しに思ふさきあまいひくとさ歌
き前あ道は一国にうけんを去しりすましくふ振子為参る
本附はうちを忘はさりしくいつとまてひけ遠ひを忘人はいとおつ
しきるまて我名る是今日も同しさまにて九破の
船にてつきりしにつきひく酒盛をきりしより部て波城の
中今日本人を連来れは作ことさるとて今は去燃て
思しき日本の風に牙件を刺さく日本の衣服を恋てけ

けと云今にハ惣髪ニ而長く垂るを又く身体ニ刺繍を
此頃後を受たれハこよなう寒さを覚へけり故当所ニ而ハ
何しく草りとも弟とも之ハ草りハ前し蓙(ござ)出して縁り
草りと作りてもてる日本の姿ニ似てけり
惣して日ロシヤ此館の人ハいつての人も髪ハ短く
きん切りして日本ニ而いふ栗何とまとふ小さき三髷を
刺して居る也女ハ髪長きを組ミて達る也女帝の体ニ而ハ
男も皆く髪を達く垂ありとて宝貴ハさんさりて甚
しては髪をのえしく雛髪此様ニ而垂てあり
九艘の船の乗組出役拾一同ニ二十人斗同所ニ而切先直
上りて見れハ船を造り居ての何り難治すくもなめ
しくてわハ近の人ハ来りける鬢の毛を植立る鞁(かむ)り
物をかふり鉄炮をかつぎ玉入く見ゆる胴乱様の物を
資負する二人来り是ハカサクと云て日本の足軽杯の
者之と云役人ニ而宰若き人を先ニ立てけり余坂路を
登りしと已りて登りけり大手ニ而出門ニ至れハ
かのカサク同し様しく左側ニ十二人立て居るうち十
人ハ鉄炮をかつぎ二人ハ剣(けん)を抜持してうつきニ居る程

もし斯れハヨイしヨイと一同に勢を立へり平吉ハ
忘られし心ひらけりましてハいさゝかも思ふ事なくて八
すて心安く未迄として連りを招心よく心ひつ悦りけりハ
又門有こても又友例にカサリの使へ来る夜三方の如く招
のかまハ又門をこそみ毛風し使へ来て十八九人並ひ立けれ
つまれて向ひの方にけりハ大きな蓋断とおかしさ不ふ
知るそこニ熊吉かり此何も知まぬ獣の足斗像ニそて
熊も来るり内に入れハいとく不きそそこへ太き杖を
登りけり二杖の下にむいくろまて法ふ窓を下て丈ケ

帰りを云来り之先明子を引なりハ上へ知らせまゐ迄へし部
て杖をとるまゝ九ニ町斗も登ぬへし下くに広くして
体に下りり上り三て也ハいと広こさ大成変之是ハアミシツカ云て八丈寺の役人ニ而
大きの中ニ成物ニとぞ名ツくハ
ハラノケと云ひ成代林云根の志成り杖のよりはへハラノケ出迎へ平吉ヲ
手の跡志つと握り抜産変にいさゝかひけりにいとしハらめく
化粧し郡ふり来たる両に板ふて添ふる之陸子八あらて
ふ之まんに法ふりふりとをおもしこれハ湊の秋目
の下ニ見せ男共ハ気色云ん方なし頻く母添根の細へ
平吉をかくらせて楽しみなるてあかしとやかくする
秘に

二十人此人々も上り来迄ハ志ん中ニ大きな成基を戴つゝも
持出して浅て英へ下り皆し麻几ニ登る主君を
麻机ニ登りける時て次男ニ池を出る大将獣の肉之
皆々之へ下ハ雑炊を配りし之
二人之人ツて英ぶ立て是を掛て一示ニ静まり返て
かくりして向ひの方へ配りきり又こなた回り輪示
皆是をとらけて皆是ろてこ皆て巳むさまいて
麺配り之見る人へ渠（かれ）ハ上手之々れハ下手之杯役者
おとり杯も手を出すりハ多くて手ハこまぬき居
て是と様々さまへの振をする事ありとそ
扨一通り終りて器物を引取又次男ニ者の出て皆に酒
のんてハ配りさししすゝを主君ハ配りて御酒ハ知らん皆
侍りて麻几ニ登りて振りぬれハハラノ行主君ろ手
を取りて七八郎之へ来迄とて連れ雑炊を三ツ四ツ
其の雑炊へ連れ行て麻机ニかくしむ向かハいとされ
やうなる婦人やう人麻机を英へ振りハラノつこ志女ニ何ゐる
三々迄ハ終りて其の女壱人来りて主君の前ニ立ひさ
まづ肩を摘之へ手を取りて振をするさま又をしての
ち

重吉ハ目を見すゑてあきれ入りしと見えて物言はて
又こなたに来る女来りて用心さしもの事あらし見え入れ
女皆々用心専らとしてしもの床机にかゝりけるか
終りけれハハラノツハ果たるかな誠ニハ重吉一人向ひ居るに八
女ハ人数揃ひ来り御酒肴菓子なと出し出る女ハ重吉を
さてハ笑ふ重吉ハいかなる訳か更に知らぬ程の心なく色
青ざめていかゞ哉ひなる程表の騒動さてハ河童騒
出来てあらふかと踊りをする声又ゆ是ハ中の聞計り
此時大勢大声にて斬り込む人々ここ初めて皆々静りて
オロ三ヤ形かた二人と重吉ともに二人揃ひ来りて重吉を又初めの
表の騒動へ連行て床机に並ぶ女重吉が如く娘人ともに
来りしにさまで此事を物語りて重吉に後に海鉄砲の
獅子舞見物の事相済みしか急ニ申て女ハ支例
（二人づつ出て来る向ひハラノツとオロ三ヤ此形かた二人と供
に並び居る形にて十日五日計の間のことハ十四五人揃ておよび
上り来りしか是ハ獅子舞にて終て一同にお辞儀を初めて
重吉に見するを聞き変事なれとも重吉ハいきりきりの私
終りてから力不足なる人へ来る迄ハ何事も心気疲れへいさゝ

辰ののこされハ面白しと色おりにハいつ様よあるまじ
心をはなし先辰年之新く取りと果くおもる子ハ皆道遠く
下りけり秋雨が不秋食と示しき物出し下道と
後道ハ直暮れ上へさまし札物を持出さ下いつまと
草の不之気を重者ところのあしハ

何ゝ麦　三四升斗り　鉄炮　壱挺　弐又貫目此合処
吸物椀　蓋付　六ッ入　草の橋多まる入根のさせるの
小田原挑灯　扨々々の紋と　へ木と出ハる
志ち方後に候けり
此くなのイ口ハ平仮名のいろは出る物　和漢年代記

あふすハこれ止りて秋彼不親ら夫も心よ叶なたハ比城
此を見とぬとも心の従ゐ年ひ衰へ愈しいつとも べケッり
誤ひ辰る不ハ一生を誤るへし共ハ土累を出く年月
難題をしこそのふも存ことのこ示ひ募りてハ後り
ハ病とぬへし先一文ハ存ことを志る様よ乱る也
ク人へ心を慰めことのしうて身をまてやうに持く社今之生の
ある甲斐もいれさ也ハ去六ッ人の女の肉いら道数え年へす
へしいされく心よ叶ひなされ気と角を今宵ハ夜も寄

鉄炮の指南の書物 此書物すへて日本ニての指南の名ニても御座候とも改めて（頭注）

是木の思しを見読りしれハヲロニシヤの書き紙の大さ成書物を
二冊出しけり是ハ日本詞をヲロニシヤ文字ニて要しく
去る書物(しよもつ)之それをさして日本詞とイキリス詞とさしてハヲラ
ノウとヲロニシヤの船頭と重吉ニ云出せ船ハイキリスの船
ハ重吉を日本へ帰し候ハ天ニ有し恵めを念して一生水主
ニて其ニ様り二若日本へ帰りさして忘りしへケツニ別して
実ニ英雄し親前ニハ私日本六艘(そう)何国迄ハいつれ船ニても
ニ迄ハ実ニ帰るへしといふと思ふと云ふ事を重吉ハイキ
リス詞ハ少しこし覚へ其迄と思ふニましの事をいふ思ふ事も
親ぬもあれハ云訳をする事ニかなんとこまりたり梅つふ
思ひ出す事ニ御くふニ来りしるをイキリスの
船頭を頼ニしめ親をのこし此分恋しく船頭ハ誠の深切
夫ハ何ニ今宵此女房ともニ家ニ中くりなハ熱りし念をと
思ひ出して又心の中ニ金毘羅を祈念しいかゝく
今を難とのかれさせてたむ々人と深く念し梅ふて
其云根を工夫しく若所ニハハ々ヲ毛ハ恋き深とよハ

使へども気に叶ハ不へ気ある事ハ不和に於し二人の者ハ
心細く思ひて注居るを皆々聞て我等ハ家に止まり
又ハ二人の者をもいかに難き仕ん丈夫ハ是非とも帰へる事
二人の物も家に帰寄せて待つへくといひ分れハさハいはれと
先々今宵ハ其女の肉を喰れ我ましてここに留れと待て
云々をよく用に出まりくハ恐かりけんと思ひさあらハ
其日ハ二人の者も速来り爰に居くきも携(たづさ)へて来るや
今宵ハともかくも船へ帰して置くと待て云々れハ
漸くハ行すの船迎ひの人を来らし必す来れと云生れ
其词ハ遠へしと思ひて契りて宮ハ附来りまうはシヤの二人
と読者に宰和して舟人を帰り寄り舟の中にて皆々取て
居る祖子之様相をよめくつりしと思ひ足下ハさハ止へまし
ペケツの心底ハラノウの云に遠すハいかなりせん今宵ハペケ
ツの心をとりて帰る殿も早へ帰り家来りてなる之
船に帰す心無くハペケツの機嫌をとりて殿をハ心へつゝ
来二三年ハ一先に此所に止まりて二三年も学ひ...
天文をも覚ゆへし天文地理を覚へて上ハ早々にゆく
事も出来るへし其附船と成て此所の者をいつれ早帰へ切

交易なして来るへしといひく維新様を縫多様迄
弟へ帰り扨取ハ長崎へやりて紅毛へ送り出し
私ハ我物なりて弟にて当家を成為さり又ハ同所の人
にハ皆く死しけるを家ハ断生延れハ又も悲しき海
上を経て帰んよりも小分こ人めの女弟にても及ハ
ざる程の美人なれハ今其妻を家妻としてハテノコの云ニ
任せて此玉に留り空しく一生を経て乏さり旅迷ひ来り
てさまよしに工夫する程ニ扨ハ好くり例のごとくしよくし
も頼りて扱ひ小以重ても ハテノコ所まて法に云咲せ
るに此ハ別して頼まんとおもひなりして迷乃人来るを待て居
とのこと免じ居たり又云ふに大事の今迄へケツの学さ
恵を交へて今事のりをもいひ咲せ段ハテノコの方へ頼人
ハ写しかるす一くひ此事を云咲せて此上まて頼んと心付
へケツに向ひさうさくハ弟へ連行くしと云ふにハ備之と云
なさ咲さるゝハ家ハ此所ニ迄之へしとて云なれ迄ハヘケツ
大に怒り其事を説し咲ける夜に城中にてバテノコの云し
事を包ます語り咲せけれハヘケツ折節ひとく面をて
なさハ恩ろ彼方をも丁寧のかねハテノコの云ふをも識とおもひ

此所ニ残りたるハ必ず日本へ帰るハ成へからん歟得てハ
ラノツミハ能く猿ニ云ひたる顔し必す心を迷ハしへからん
とて気を静めて心定まりて家にかへり人目の忍(まど)ひあき
事を忘れ逢ひし故ニへケツハ殿中へ行いかに成節と云ふ
さりとて稲荷へ帰り来りける二其ハ塩ハ又くハラノツの方へ
も早ク夜も来し我ある事八丈ニ至りて其後ハ何とも
云ハさりける

此處ニ返る此中ニ彼へインジンの人何か交易ニ来り
ける事ニのアミシツカの何ひニ語りたる事何かハ知らん
赤き実のなりける木ニの札成木下ニ在れをアミシツカれ
女と人行て此處なるインジンの人なの女と三人共ニつれ
行けり其後(のち)アミシツカニてハ又もインジン此人の来るを待
ある日船多く船日和ニ乗人来りて来て来りたるを
兼て浦へ走りて船をも不思へ引上げて其所を
立去りたるとぞ　かゝる事のみなれバ知らで来りて
殺しぬる乳婦をある人にハバラノウの様へ見せさいけ
無く傷へて門も三度ニかく絶えて
込て二度ありけるとそ

扨てオロシヤ船ニ漂流の船頭とペゲツと申つどひ咄の序ニ
ペゲツ云ふより又えとのノウハイスクシヤへ廿丈より廣東南
京の方へ交易ニ行船あれハ商人ハ別して日本長崎
へ行船ニ托して送り遣さんと云ふニ是を語りけるを
ヨロシヤ此船頭も聞てされハいと貴う存し今ハヨロシヤと
日本とハむつまじく成たり殊ニヨホーツカニハ日本人も居
られけれハ 是ハ仙台の者也 そこへ連行て胆夫人日本へ
送り帰さる船之人がらんと云出しけれハペゲツも尤ニ云ハ
承り是ニ居られどもされハ厭ふて共ともかくも只ハ却て人
ともいはれさるへくその船頭に交易をするといふ時ハペゲツの談
迹(あと)より来りされハ皆々交易をし果て上るニ付くを見て
船乗りし者ハ其の内ニハ海路りてヨホーツカへハ廿絶し
是よりて商人を連行くんがしな先ニ船の掟を出して
皆々先之交易をなさせられ是ニ於て各々ニ皆ゝ申
下し其れハ悦ひて交易を始めけり塩物の類をイキリス
舟より出して皮類をアミ三ツ日より云て船へつゝ
大ぶり猟師とも猟処の皮抔余多つゝ入れより
廣東南京の方へ行へき船を商人ニ為ニ悉その方ニ是
し来らんハいケ年の迚り迄ニても へケツク悉との

にうつりたるを
組直し　アミシツカより凡四年居て船を出して去る
年未の方を差て漕行く事四十八日めにヲロシヤ
の北亜細亜のうちカムサスカ（加模西葛杜加の事）の島へ来りしなり
此島凡四千里余もあるへし　実からり極東の二十三湊ありヲロシヤ
までは此湊の名をクリヽと云　是よりてハ奥エソと云（蝦夷）
此嶋々ならひて此二十三湊の内二湊ハエソへよりて並
湊ニ二島ありて人住むヲロシヤ領の二十一湊の内四湊ハ人住
めり　其余ハ人の住ぬ湊也　此湊々の方凡五里十里中下
もあり　大きなるハ二十里もあり　此湊の前を通りぬけ
てヲホーツカへ至りてあるを皆渡りして海を見へわかれたまし
方晴るゝ迄ハ風烈しく揺しくれハすみやかに船を留めて見合
せし也　尤風よき時ハ早くも晴れハ風付して少しも
船を出し難し　へケツク以来ハ船を此所より杖を揚り程に
海氷り来れハ船とても先へハ進みかたし　実に山へ二百里ほとあり
是ハカムサスカの口ニあり　ここなるの所そこへ出合せし事一通
路あるまてハ大し　若しくハ又ヲホーツカまて陸地を引つきと
ふとも能き振ふと揺ニされハ又もや船出して其の
方へ二百里行て湊の入口へ着けハ石火矢一ツ放してふれ

相しく見ゆるてハ十文ドとかきしるる

志すしれたるこを立ニなり　ちるを建る取ハ畢取るてハ許しといふ

志すしこらて支那くふハ何くの日ろてたつしの文字を建る知らず

故十文字ハ切支丹の像のたるつ事様の形ろて何ぞ手ニ見ふまれ更角故

十文字の下を

附るるの意とて　実ハ漢ニ三里半之漢今在次失の意なし

呼ろく定め鏡ろて見定め橋舟二艘ふ乗るとさ事とを横

宮もく逆ひ來りよりは形ハカムサスカの代官ヘイサヤメー

テ苗字ルスカ山路今志人来来りヘケツと見合をする板子之

すり

須ぐこて合舟一通派りし先ニ漢ヘ宮もと云形く漢

ヘカく旋をお旅し事生ハ件のルスカウ舟詞まて日本

人々しく呼ぶ故宿舎出く對面しよりルスカウ云ふハ

為席の高田屋の嘉兵衛を知らく居るうく命ふ知らく居る

りしを旅事生ハ名れをふりて日本ヘ帰りなり今ハ日本と

ヲロシヤと軍もなし睦敷して互ハ互ニ欽ろし於治ら

んふも交るれハ仍すの釈来る居し逆の人をおこせへ

といふく日の着るまて欽れハヘルスカウハ入りぬるの高田屋

嘉兵衛ヲロシヤヘ来し事ハ兼て呼居るよ今ハ日本

ヘ帰りしと呼ひつふしる旅先ひつてふしまなり

此高田屋の嘉兵衛と云者ハ元ハ多田誠又ニ三百文なくく

兵庫ニ船頭大此ろふかてひくさうし比ニ更を仕出今ハ

船頭のまとを云人と成て大船十七艘もちて大坂江戸
まで出店をもうけ松前箱館まで凡日本三十町斗の
家を構へ年々通ふ上壱万数斗つくも出す様成大富
家と成りし先にヲロシヤの船立入来り乱婚せんとし
けるに其船入来るヲロシヤへ引し高太夫とうけつけてヲロシヤ
にてもりし人は椰まりしてヲロシヤ人も打しこといぐ
し哀成義にて彼かりしにて重吉語りき
併為躰にて彼かくれ外カウより往の人をおこさせし重吉
一人併ひかくれ外力られ許へ引侍ち子まても定りられハ何かくれ
とまりかし梅并れ事を見せんとて江戸の錦絵太臣
蔵の十振つさの錦を出しにて是は高く売ておし
とてみせす又是は故人トロフへ当行さ物成りこすけとて
あか持ち見とりおこせし清急を出しりまとる是は此玉へ
来りし附せ張く成りし横横投はし上日本此人へ源
り迄て其ハ玉へ参りる先何にハ日本へ送り帰してもへかし
とゆふ事をきくヲロシヤ何代官は久カら探高面屋
と行き見てく今は心易しとひより此我木も日本へ
送り帰へしてまんやと云事は是へなり送り帰者へし

さて是とても年はやり越し今年も薩摩の人に
この船にて送り帰らるべき趣なれば海の凪時節より
叛れは船の通路止りて来年の夏にならされはかな
出し難し今は軍もなく心安く容易に返事して来年の
夏を待べしとて云々此は八月十五日の比なるに今
港にかゝり居る是は童者は見く陸へ上り所々見物して
昼の志てめに帰り又出て晩には船へ帰りて休みなり
新く九月の節に好に叛れて湊口にさしかゝる船一艘見へけり
此夕方に四郎は何是杜(こそ)日本人を送りしき船のまどり
きなる是何の船か津を是は米も来たる客なれば心安く
へしとて救迎ひの船をやる二里斗の所に友敵の子比時
斗に叛れて湊にはいりけりイキリス船かも手結
ひとめるに此船の中にも日本人二人乗るといふを
吹く懐かしく夜な夜な彼岸の中より二人もことさらも日本
人二人乗るといふを吹く是夜な乗りとて何か
行きて陸へ上り演ひまて出会いに直にオロシヤの衣装
八歳是とり幸人と志り衣是は古今人様に乗りんとて訛
して晴夜懐夜党て乞く打つ布にたゝいゝ抱き付きり抜

さ有しハ何国の人成しや問ふしハ薩摩の国の者
成り吹流されて此国ニ来りしとて云薩摩人の
吹流されて帰る事を妻数間有るハ船頭ニ壱人と云
なり共ハ角次郎ニ吉助と云者と二人成りしハ琉
球国へ十七年半通ひしニ此度ハ薩州の作巳来を以て
江戸へ来るとて難風ニ逢吹流されて上りの沖より
元船ニ成りて上ハ六ケ月半漂ひ居りし米ハ何方も尽
食ニ堪兼ねて十三人死しけりと云ふを聞て我
ども困窮之とりにて志ひ相の死骸ハいつし
たひ事を聞てハかなしみ海へ投込ニ成りと云ふにて
同年二月も薩摩人之危難之事を云ひち丈
なり此十二人乗し船ニ乗りて四十日目ニ鯨人ぞそに
夜ニ入て其後ハ海りけニ船を止めて居るに猛ニ南風俄ニ
東風ニ替り鯨へ打つまふれて兵船けるがやがて六人
鯨へ追上りけるニ其ハ内三人ハ二人死しけり二人生残
りて岩の洞(ほら)の中ニ住居して木芽海苔抔を拾ひ食ひて
四十日斗そこニ住居りけるハ命も続くまじとて一人
病人有残し置二人連れて浦を回りいわく租ニ二里
斗も

扨て夷の据ニて作りたる後を若き夷人に打連行
詞通せさる事ハ夷にとも事永く見せ夷を心にかけ根
子之事ハ夷語ニ来れとハ来さりて連行たるに此語ハ
或ハ右ニ穴の中に住居して夷の肉餘物をとりて
食物と成し家を彼共二語の肉ヲロシヤの飲食にとりて
ラッコヲコタニと此語之そこの穴の中ニて一夜を明し
渉し来たる病人も又の日連来りてそこに一年斗居
暮らし帰る年に彼らく其ハ語人此カムサスカへ連（つれ）来り二度
夫へ送られ打しり更に夷人のエトロフ語くるさく所近
斯く連ハ風悪しくて引返し又家へ戻り来りしことなるらん
と語る事者も歳月の上の所以までを語り笑せられハ
或ハ面白しと思ひ連れ聞し日本の人を連ハいつまでも
親兄弟も同じ心に思ふとて本意に悦び行人別板
此人々と一同ふれ久しカウの元に引上ハ人一両に一万金貸
し渡して同居せしめ夫より凡十年斗経てイキ
リスの船既ヘケツ出役（やく）ヘネツカに黒塩一人ならに二人
給りて船ハアベツアデメツ初飯船既に成て此漢人を
出帆しありしか彼是かと考ひ居たる又十日斗をへて

薩摩の船路甚た去ると以ふまハ前末之人ハ衣食なり
オロシヤ国王よりの御領之船を不意に遣ちし志イキリス此船路へ
領之と云を咲く不審して思ひ扱ハそなたハオロシヤへ
何を云ふ訳しなるやと問へハ否さなりとて云郷ハ前
不用事なる人ぞを叉を申し咲ふかへまてハあのきう
と思ふ人ハ郷ぶ思たりに咲ふりと以ふなるて重言いて往立
て思ひ薩摩へハオロシヤか恵こを叉我しハその事
なりそてハ日本に段りいふかしく忘れたるしとも云訳なかる
画し是れハ此所なるそれ文からの下寄付く日本のなるを云扱
ふオロシテレイクワニと云者阿りあるも此人ハ云扱ふなるなる
ま薩摩人今ハ継続なるても叉て彩色我しをやしむる
あんなとなるても悩ききめ事ひ之此事を云ても程前
しを云まり段ハ髪刺ありても教さんと思ひつかまに
テレイクワニか許人すり不今ハ彼所に出して学書之と以ふを
味なられと云者達ハ大将か来りさせて国不分思しく日本云
致立を大将と云と心頃なる重言も船路ハ是も極めてオニ
大将之と思ひて以為皆人重言を大将と云りとなひたる。
テレイクワニ頼り来り何の用か度不自由か夜か術無か云か
なといと思まに云を重言ハ法ふつてて悪しく勢を思ふし

てそこにてハ薩摩人分ハ何物を恵ますして以て之
何も恵まれる事なくハ甚しく苦しみ飢ハ薩摩人のことを厚
く取扱ひくいろく我等をハ世話をせねといふ事ハヲロシヤの
レイロニテ指支ハ夜なる事ニ薪く都分の節ハヲロシヤの
船分の者く(へ)以て此漂流人ハ来りとも何にてても扱ひて本
国へ送り遣ス千島の船なる事も能く人ハヲロシヤの船分ヲ
ニテユタニへ送るへしそこにてハ湊上にてイキリス人の船
頭ま助けられて家に来りまし人ハ其の事をカム
サスカの役人分へ家数ハ何ひなる事等ハ本国へ送り遣す
ヨリもすてに扱数ハ何方ゟハ帰る事も九ヶ月なる之
家分数ハトロリ之日本のり数ありて凡四千里ばかり
夫ゟ此カムサスカ分ヲホーツカ之三ヶ月ヲホーツカゟ
ユクツカ之又三ヶ月ユクーツカゟ都之又三ヶ月なる之
仙臺の若六と云者今ハ此ユクーツカにてカヒタンの娘を
妻として日本通詞を勤て居るとそ今の名ハイハニ
ヲロセイキセロといふなり
右之ハ往来ハ十八ヶ月を経る之ハ都へ入る事も知れる
中之へケツま渡り多くへケツのいふまハ扱ハ未家羽解

てふつ麼へハ異年よ功ろを長連来りけるニ人へ宮ニ対ヘハ
いつ斗り難き歎しむへく此ハ列ぬ室ニ玉ニ長在せハ病を
生せん事も斗り難しかりしニ伏よ定ニ之けとハ旅へ
ハ内ニ之して免状ニ人へ一同ニ功しく遣しけれ又カヽ
ま八き二し友故しそ来年迄の二人の旅ハへケツ分子两
とも申して云しニいつも来着迄ハ取後合拘まても
我旅ハんと云さるそも薩摩人へハ二ヽ分送りける異一
引取迄ニを尾張の二人ハ之さて送りけく引渡せ分
外ニしける人ハよく又人ハ遣せも心得ありと文合られ

と相違て交易のかしニいかさまに功ある事かさ遣ハ夫故ニとそへ
ケツハ宮ニ止り船ハ彼船頭ニハ廣東の方へ申しさ出されと
云々ニそ皇古ハ思ひの外ニ動て(ヘケツ斗ニハひを哭て
驚也情よめ行ろ鑿判も恥かしく船頭迄へケツ添切を
受すゝをと添くかんし深を揮へて之る綴りたる形て其主人と
へ新ニ小ルタカラれ許ニ在く其ツよ今年の貰を社倍
着し者り

カムサスカニ返首の申し見世渡印し其とも人さし
何かへクシめ遣ハきかくきしとニ小をうけ俤とて

万事と辛き思ひをしけるも月日ハさる之時を
うつしも忘れず心ましくさ事ハかしこき由まゝ祢ひ出る
事もとこふふれあつるを大かたの事ハ事ニふ
れて思ひ出る折も何事とてま祢ひ出んとして、
何事ニつけても思ひ出し難きまさにあらん
五月も十日ことへとこかる身をかくまことのやうに
大かたの物語ましくきる身にふまでと何事も
しとその縁にもふかき事ハつきしに思ひ出る身も
わこすりをかくあり今の対面にてハ何ひとつより
出さんとするもかくさきまるもふさん待へ目と全吉云々ふだめ
かぬ心地ハしつれとわすれさふきつてさしまてもあそれ
ハ吾もふしつまゝ事とあさひ井たいハゑしつれハ牛ニハ
まふ昔まつくひ出しする事とも何ゆゑと言ひ
何つかて家ニ記しおかまん
ヘケツの養ひ文く別得ゆを送り居るゆと心もく
思ひてカムサスカ人ニ共まるをと云出る事ニ想ニ当
本風ニ人を助る事と覚へとされハヘケツ物のためもよ
是ゆ世ハたとへハ十全の費へ何事ハ皆ニ十金納る

なまじハ何なうち心をいくむなる色を見ふましとぞいひぬ
カムサスカの海ハ氷海にてさていと寒さ烈しけれハ九月より
明ケ年の四月迄ハ海一面に厚さ二丈余にも氷りて
船の往来ハ難儀し又四月になれハやゝ氷解ぬれと拌ける
氷風なとにて少しつゝ吹散られ一ッかたまりに小さき島の様に
鎮く海の上を流れ行りくに是を氷山といふなり
その夜此岩山なとも打くてするとふて走り去るなれは
船行に是ハ船をいてくるにす最六月より末に至れハ船ハ
出る凡六月分八月迄二ヶ月の間なりてハ船通路叶ふ
熟して北アメリカの方なりとぞ云ふ船ハ湖水にて温つゞきなり
此土民ハ背之丈五六尺余も積ある者にても家ハ二三尺
煙出分煙の立とぞ見く家々にありと見ひて打てこれハ
家の入口へ下り行居たり是ハ寒気を制してがんぎを
付たるもの一家ハ熟して大き成材木を積て造りたる
一間と窓を明けてその窓ハ二重まんとて張たる物之
屋根も同しく材木を組合て上へ押せ三尺余も
重ね置之布子ハ小家なるもハ板にて囲ひたるも
又一寸も行きふもの二床ハ板家之柱などの合せ一枚板

して鎚音界にて振りして上下へ硼砂の切したを流さるより
きをさに文一ッ入口の戸開りてきをさの事也に斧を以て
削り雁木を付第く上へ登る様にしたるもの也 扨 鉄炭の
内には甸を焼釜様成りのを作り置く 夫中にて大
を焚く ひ火を共く不るて 寸部の物を炭焼する也 風框へ通りたる畑出し火燻を
こしく出して 壺の如りに手丸振にてふさきて 扨大球
其く口を塞ぎて くもりまいくつもある穴分火大事を
出す様に仕たを ふり此穴分出る火へ竃にて家の肉にて八
音事を覚へ 凡いと暖まりて 沸だらむ 振之段 害八日り
ふる夜 次の肩に穴の方へ積りて まだらく成る夜 毎
朝出して 斧にて 壺を切掛ふ二尺八寸てきしも 数しの
風框の土を通りて 切事に
冬路炭をこゝりくまハましに二麻のの皮を毛炭係りて 仕立る
壺会舟を落とし 此分張を一傍にて仕立 張へ此をめぐらく
引そうさて 落した穀の不ハ穴をるく 額の不此ハ二ッ全へ鯱の立
此後に毛りの毛を植るく 穀へ壺の降かくふぬ振する為物
すり其人ハく毛鉄またる先足へハ其中に住む獣の皮にて
造りたる皆を売くに 水獣の皮ハ水にひたくも延びず 此山に住獣にても 壺の内にてそくたる獣なるにも其の獣の皮の

撥とハ伊達 撥をもつて太夫より引はなして、かゝる二曲（えり）をサシカと云
本を二ツ合て上へこ縫殿の扱に結て中を
前くしく残して束ねて扱に結り渡して遊りする
をつけて扇をたゝみとまり上ハ足をよせて引かけすに結ひて力を先へ
立ニハ手を立て引す二志り返して立る太ハ承して付すは 四ツ過
に取れハ太夫は前へかりんと蒸器を持て居る時カツしと
又ハ左へ引ホカリしと又ハ右へ引ヒコしくしと又ハ下くに
引二アりしと又ハとまる二梓のなれ前をとかし頭の
前へハ湯桶の如く鉄の輪を付る物を持て末桶にも
引かけ見る又左行へ参る桶附共ハ梓のかなくて音
て由を二太の鉦手ぬ附ハ丈をとふりふくて鉄輪をかけて
時ハ世ハ先に立る太夫之出す二扱くも寄る萬附
ハ五ツカナイ とりかけの みとふきるこ 工てヨーノヘツ 四十しむやの 扱ひかけ ツハカいぬとふ ことふり
とて前に立る太夫を手に持りてうてハ先に立るいぬ
て前出す二先に立る太夫をもくて太をよく仕込ふる
てハらしく流鼓の上のこを如くまとく手拍をたく謡
ふしく一節くく手追ふ手わすす侍る物ふり取る
所へ手前を出ハ鼓車揆掻きたる打てとも横掻て

落るを大ハかまりけりむせうて引かけりを先よ立てかけりへいり
れハ止めて人通る事ニ下り坂よりまきハりの様をまよおもひ
行いしふされハ進ミおる之一新旅家ても是ハ誰かいぬ
されハ誰なとて論して食をこうこつゝて飼おる之食ハせり
ジのりまこん を天ツ上ツ宛もいつきかま之壺を房へかけ時ハあり飲り
九ツ斗と食せ御て其ハ雄ハ先へかけ若をさへきせ然
ありまくかりてたへんとていふて之女を持て居人壺房
揃へかけ大親しき人への女を借りてかけこと時よふあ乗よこ
あるくなせりシをおかりて人さするこカムサスカのあしの
房へイ子チカへキいりの色ろ面ハチレン藤のりまこ引する派も及とて
トヒハ薪のをこ取まかも用ひさるふ太よりする之是ハ木を
わまりて積ねこ大さよ作り人を木を積ねるへ来ね
しるものゝ是を一丈ル文とて云太さ若ハ木を一本斗
ツて薪の取るよを云ふ引之取解てハさる業出来ぬ哉
木を伐薪を取事ハ書を読てものする之重者ハ用紀
よりて君てするふ所てふ木の切かる所をいふまゝも中程
分切て根え分切る木ハあしふ志んよ花ひしふ書より
堤れる時のこ切事成る書解てこれハ皆中程分下つき

語りたる之あり
ボツンツカと云所の川の辺りに木あまた生する不何
りとくさとしまざるの事ハ日本にあるのとハさして替らぬ
事情の葉ハ見分ぬ多し木もこの辺ぬ木のこ
多し松ハ以前も記ぶるて大盛松多き所りそれ
さ子を子供採りかりて食し日本にて云鉢鮮松のおひ之
米を一ツナと云飯にてさ又を一カーサと云ん東の五分交
莫しく萬さ之広東にて八二ヶ月の日に来実の事を生
ツその穂を摘二又枝出て二ツ宛ニそのを云一年二二度
米をとる之細かく小粒にて刃あ玉の志りとと云種のかり之
米ハ稲別の粘て日杯より取こてこツかこさ粥の粘に焚て
食しあるハ小麦の粉子と歟の国とのこ食す粉子の
あるま盛衝を「ヒレフハン」又「ヒレツ」ハとと云られあるをとツハツと云
童右文の年日本へ帰らんとする頃にまりてこの名を
留りと云振そうあるハ四五年來居に居あるね事成た
定めて年ハ深山に入ら方へし绝を食ひ給ふへしなと
以ふを何しに年をも食んとて人ち相ハ何をいて命をつ
あきらかにと云大米をいて命をつるなしと云ふ事ハ
日く

米を食ふ虫なれバしゐて偏りを云ても限りのなきか
なきとも云て笑ひけりとそ

○鰈をカンハラといふ名あれハ其大さなる頭ありて鰓の甲の
如く堅さもの付なりアミシツカなりてハ且つ二斗計もなれ
いと食しなりがいとやハらかにて甘き味ひもなし

○宮古なしかの従詞の通せぬにハ大きにこまりけるを
いつもしかなのつかに一ツ二ツつゝ覚へ来りて後にハかなりに
用も無しけるを或る時あつ何ふ物をこはせて覚ハまんと
ふそと尋ぬるも何かすゑゐぬ就つきのことして通せぬ様に
多分ふとかなすくもなり向なる人尋ふ物を出してハカリナと云を
呼べそ通分ハしなすく分間呼ぶもものを出してカリナと云ハ
何とと言ふ友きましの事を書付由て其ハ知しきと
出してハカリナしと云ハつきりしまそのなをといふを書付
由来ル人太加へてハ覚へくしけり虫りしま物の名も
又詞とも覚へ来りけの虫の人の物かくるありなるもかしくて
参り来り或時ハいとしく嬉しくりしま丈などかおそなりて
こなたかも此様仕りて見る後ハ大かたの事ハまま通し
けり初めの従人の言へけるものふハよきさ天幸之ハなま由の…

そゝといふ事をトプゲンプドロマダラシといふ事を覚へたり人へ
此元へけりトヅラゲンドロマダラシといひし事ハサデン〳〵と云在
是ハ侍子へ儒をみ多へなり 侍子よ儒を逢をうり教に行し採れるをへと
文よ分ふきり都主ハ物にもいまに其依廃されハ天ウルぜー人
スカぜがウリンとそり手かしい人とも粋わふねハせんうるを
吉候ゆりうり秘経くゞ覚へくこれハテけせルぜー人とハ
何を抜きといふ事ハ入カセとハ此の事しかウリニハ物いまねと
ふ事ニ何を抜きて出もせれ物もいりねそといひ言ニなり
後よハ青抔へ氐しきゝまふくひけり時ハニセヤドニイレバリ（私の敵よきりな）

クセレツーニヌハエラシナと云人ハ先の人ヘランナーナジメと云て多有（おいとまゝす）
をわるゝ時ニ名のゝよりヲヱンノダイウダイホロフシヤエ〳〵と云
ゝ杓ゆりしとぞ

○人の許へ行テウヲロボタイるすぐ人ハヘヲルハカヤセイ随と言ふ（住るゝすゝて）（志ゆゝん）
ヘニテウと言ふるハ何もせねといふ事ニ又ハヘヲルハカマモイ採（じゅうん）（洗ふ）
いふヘモイとハ洗ふ事をいふ湯水より採いふヘモイと
いふ事り入カセハ此といふ事数を昔よりしと云時ハ入カセヘス
カセとゝ云ニ東して発語の詞ニヘナアとゝ云る事を付ていふ事
受し形をスーナとゝ云をナアスーナといふ形なり

○女の名よみかたも〜ヒヨードロイハノブナとよみ付之是ハ家本
の婦人の名に読文字を付る類之〜クラヒヨードロイハノブナ杯の
記之旨ホハ異〜クラ又ハアブトツチラ杯のこと也

○数ハ〜ヲチン一〜ツクト二〜テレー三〜チエテ四キヒヤー五チ〜セノ六〜ミセン七〜ヲイ八
セン九〜テニチ十〜テセツ百〜スト千〜テーセチヤ万〜テヤデーゼチヤ

○算ふるを渡事のこハいろ〜とかりても数をかそへ日本
とて行はしといふ人をするを〜エシ〜とぞ云之

○逝し汲松前箱館へ来りて蝦夷君高橋君杯のもとへ出入る
蝦夷木参法をひろく汲のことならず杯をては折ゝその所の風を
まな訳し我是なり蝦夷君を大将と君と定メて夜ゝとらし我
蝦夷に抜んでや我社蝦夷なる〜クナシ杯云事をかくれ
ハ高橋なるをクナシハ良助になるを加多緒ハ実に来りて呼に
ハ更ゝしく君しられて日本ならてハこれが為もかなくて
辰ふりあまく呼ふ孫名のこ辰ゝ叫ちをいふめしくして
日本二ツセニツケ蝦夷伊賀ハ高橋上平リロクハラアテイヅロク（全 友賑 ゝ）
ゝふりの大事蝦夷
サブカシフカセルセエ人杯云てまたむしとるなり

○日本ハ小さき浦なるを神の出たるや思ひまでハ成

○ふねと云るハそこうしてまで云を笑ふとそ

○年紀ハ　皇国の旧記に記す所の大晦日に生れても二歳なり
歳林には年ハなりしとするハいふべくして歳をと異人ハ誕生日を
もつてみな共に廿五十日に歳林と定め拙宅月と云
拘ハあらで一ヶ月の日数を定めおきて一周年ハ遠き
事とも二ヶ月にてハ五十日の事も何事ハまさに二ヶ月
まで一日目の事も何なり
○ルメカフルにて日本国の人を妻しきなどいふ事を笑て
メンデレイハこれらの事ハまことにいと大きなる事
その行ふ所のことをやや歳のやめを驚かしたるまの
王の国何ともいふ事すべしかる王の人よりもいふる
ハあらさと某はこれを人いて妻しく思ふとそさるま
の船民もおしめておとろきたりとそ
○海面の氷ハ夜の中に穴を明ガその穴を行き速殺
氷の上へ出て行くそその穴又氷り塞りて氷中へ戻る
事叶ざる故夜明けて氷の上に出る所を人々鉄炮にて
追ひ打殺すと申す事也能殿にて
さとそ
○近年振来人来りて乱暴をしきり射洩捕をなさし

て捨ぬりける所ニ酒取りて出さりける時ハ槽を打砕こうして
酒を出しけれど槽の形に石のごとく取つきたるハおのれ
所々酒を打まけてより方々をてらしけるとぞ。
○三月ニ切支丹の成敗ありける所ゟ其日を守りて
皆し二三日ほど合間根ハ食ひ汁精進をし根本比方へ一里中
の人々いつまでも出ぐく所の物へ代官出来り録多の人々の
にを守るこの事継りて根皆しけり其ふらの人々にし
にをたちひよりまへる之常来ニて不出しに謝とあつく参来
りてさりをるまへる夜まで踏りこ日斗りハ外へ出さりき
新銘をまなぶ事ハ此所にいさゝか色心に染まらく
打とあらりとて云懸ひるの手ハ一里の人へまひに一人分
心に満てさ恐る恐ハあすしとて云事をと懸ひくすります
とこへさり先にアミシツカラて六人の女の呂の字をと
こも満なるしとて云心ニ磨をとこせたる盛へし
正月に数く又祭り行りて日ゟ十日斗りおゐて精進を
して其日ゟ奉りて大なる雪達とて小さき雪達をと
終日おゐて数になるき山と山との間へ幅十間斗入にて盛
ゟ不行り山と雪にて取り入江も厚く取結つゐてゐるを

こゝの東前北山の岩谷麓北の辺をよしこゝをわたる橋ここ
よなくありし板橋を渡し下し西を左へ一夜の程に遂
雪の積りて氷りてをかしの高低も有りき振り
折りて平らならし難くすへき振りすること故南より成
り代官出来りてくだの事斗りのふさき雪瓶を山の
こゝを持上りこゝを取りて共に上船に乗りあくここ人
藤のねをわたり下しき橋の上を一さんに走り入り落ちし丈人
下里の男女(こぞ)く出て東西の山のいてきた所に開ますにとり
落ちこあるく谷走り入り落ちる共は上人一さんに落ちさる騒ひたる
向ひの山の岩を走り入り上り切り出逢り行する事なか中々には
行はいう又横の方へ上るものは知らざりて誤りて橋の中途にて
雪瓶横に傾けはとんとん下り途りもどりして下に逃げ上り落ち行
又は若き者たち一同に酔狂ひて平北皮ふに二三人も余女孫
も来して三味線引き所に上り落ちるもあり丈も中々ハ猶に
騒ぎたてて横よりより男も女も様さまにこころひ落ちる
麓より岩を登りふハ来時平りもありての所をたて一
えんまのねを走り入り落ちし此日は更に彼ありし躍
是地にて又かりもとをんけ此の所にて後七日斗の間に

さり据まて木をつりかけそれに来るゝ所をこゝにて
ゆふ助くらて出ふる振の事を書之いかなる故なるに
かたり能し故祭り此日家ふても此山人多く又ハ女抔も
連て打くて銭れ又えいり落る之者ハおしいての高低所れハ
えいり落るとておかしかるき流れ面れハ変人花所なく
勿人落とその縁又その難にてた弟しくてたへなし
いと西向しそて身子ハ波雲金銀を差て供えをもめ
背をもて表けるをもて落るハおかしく有しとなり
○十月此より納蔵も未蔵も取りて今年物見大蔵ハコシく
と云未蔵なとハ只ハチヤしもの云以之
○此女ル人妻の云夫あるハその身のとも恋をしいふこと定
ふぬ娘ふ客多くあられハ娘に疵を付ふりとてつゝしく慎む之
客夫所にハその罰ふり妻に行かれと心を付ゆく猶ふた友
夫もそれをよくきかる恋ひて有之夫おかしもあるかね女
なまこハ妻も客夫も夫をさゝの云婦しも恋すねハ殺さんと
恋ふ心あるとハ能ふにて又客夫も連て逃る抔ハ所ふ振なるも
えくてなし子と生めハ数妻の生まれハ家なるとてや
くしみ前る者と想して此女ル男をしまて所振の事

叶ざる所ハ是非もなし夫婦と成りし上ハ離別せ
ざる事ハ皆く如くなると思ふ可し之ハ是又ヲロシヤ国王を始め
いかなる貴人にても富める家にても貧しき者ハなし貴人
なりとて妾幾千人召仕ふハやはり是ハ家の隆りと
成事も知来る也是ハ子孫多く有是ハ却て人多く
国家ニ及ぶなり家栄へしも有是ハ心得違ニ百姓等も
稀なるにハあらず名振ニなる也上ハ下を恵むのみにて下より
恵む事を深く敬ふ思ひ夜下にしても名振ニなる比起
ならね振ニ其の心得にて国王は妾一切是ハ下ニ至る人の設ある
ふれしても国王と妾ハ召仕ひ事なる也とて

○里にて病人の療治をする所を設けおいて病人有ハそこく
引て療治を受なる者入用ハ悉く上より出る也是れハ病を
受ても命を助かるハ国王の恵ミなりと深く国王を尊む也
医師ハ病人を治しよき数ニ有名ニ寄てよき所へ稀なる者
御り物も増ぶなるに療治不粗末を尽すを第一の
かれ上手も多く出来る也

○国にまづく国王を尊ぶ事人々迄も朝起むくまち朝の方
へ向ひ国王をおがむなり

○ルタカラの歌合ある事も有 而るに新り此家衰へけり いと長く
続きて衰へし 父は此時年をさけ さらに番人衰へし番
人ハ是を生活にいたりて代りて出て勤る 或時ルタカラ
ハ之れにて其人と云る者ハ二人を連れ来るに彼番人に
向ひの事を申されルタカラより許されて来りし也
とても彼の者として望ましく罷(のし)りされハ二人の者ハ
大に悦び帰りてルタカラに向ひ何の故に罷をかし
之申して如しと罷らしむる事そと云者ハルタカラ
答へて是ハ歌に誤りし何しにて又さらにとたゞかりて

彼二人へ申のしらしむる事此者んこれハ番人の立ち去る
申しくしえと深く施しおもくしなりし二人起出る
所へルタカラ来りしにキヤマン此家の主人尚是ハ猶とも
代官の来りし事となりて二人ハ周章(あはて)ゝ荒々と顔を
待居ましハ申ゝくルタカラ来りて二人を番人連れ行かん
何事ならんと思ふ程ここの番人出て出りし二人に
番人を奈にもして柳の葉を奉る年来手を掴て
つけ振よりて此を番人ハ申し夕ら戻ひて流さけ
ひ然しむを二人ハ何の故か知れざりしまハ何も

ク待人あとは回ク逢ハ何事ニしてこそのふかるすくうちに後を立せ
ける書人如ハそこ一くうちの後の心算き折ふる事と云を哭て
二人ハ路へさ走り出ろく止めク逢ハ扨ハ後のひたかるよふと云を
其時ニこそ一ろんハ後を立され家筈友達辛うき敵故に
ろのくハ中ゝにいとはしくて今こ交こすに恨こ中つるまじ
悔侍りとふひ番逢ハ扨ハいさゝかも恨むふしあらず志ありと
心晴ゝすやと再こ哭乳して後ろの恋人を申しやり
ゆり新く又の日ク番人来りあれハ二人ハ面を見合せ呪
日ニ家に友に辛こゝるに逢しれハいろ〳〵恨こをり云に来つる

んとてめ逢さりかれハいろそめ逢てくえりせとあるクまかり
云ク子ゆのまりあさまに心ろしくハ忘ひ今は難友に
大逢クれハこのふの怪ひまとて酒を携えそれ増く
辛れ毒にあひよう事あてハそのしとて交さりク逢云
扨ハいまく志りと心の晴かたき事二ありかすしや又も来
れんとりかろしく云クまた今ハ中々に麁相にて肴物
あすく出して傍にのこしれハいとゝ怪ひゝて縁りけり文ろ
其時表へ驚ひて出番逢ハまく人見集りて水柱をさくしあく
に鐡れ居りしに二人の青き顔何かふてを大るまゝ事

あるハ湯へ入て喜吉が顔へ中りたり子供の戯れなりしが先
押しとも不叱帰りたりしに又の日彼喜吉也無遠慮に遊来
りて能く裸になりてつけたり夜なりとてわたりたるものハ其の
ままむつく湯中にてとつかるものハかしハ済まさおしたふ
そとより入ハこまのふとうるさの顔へ水を手付るものハそうするの
恨みの晴るるハ報するにといふを咲て母ハ家中の
番人の打すんと心付いてるも恨にあらず幼き人の
戯れなりよし行末ハ何のこともなかるべきんと論しつも
ひかまハ又再三叱しても恨ひく連帰り能く
顔の扱を携へありてありて恨ひを云ふなりへてしたてま
の人にまで何も心の内又恨に慎む事何を深く嫌ふ也
これハ喧嘩怒りふ事に先ハなきこと多し行末ハ中々又差人
かなくさなく此理恨を咲て孔し大前争ひハかくて道理も
恨みのなひなりをその中にも却て恨みなきさ命を害
また此之人連打さ先の差人とよくはたり根こそ
いかなるき様人となれてる業にしかれハおのづから誰とも
またる情とい云ふ交ハなくてすて家の恨を知て先の人
の後のいひたるをわりて之おまへいる人とて此には是とするも

一異人ハしらよ一人も心とけたる者なしと云ふ憂を成
為れ是れまでもめし侍るなり
○将の時此人童吉が砂糖を恵みけり又いとま下り
てハ砂糖なりしかれハかゝる砂糖とかくも又あめかいひく
役せられハ志ふハ珍生達よ行く人と云ふを亂食
きね物ともも有る食ハしむへききりと云ふく程ともあへ
きりられハ持帰りて頻りに来るが進り砂糖を持来りし
とて童吉叫ひとなり極人さへ恐まれなハ教されんも
手り鍋くさ進ハとて餅りられホり云候ふしてなまき
揃とこゑそふた異人再び見ましと答ひて猶更人ヽ此
童吉を見て居るかゝ折ふしハよふさまて異此童性を
聞たし糖なりも云をもりて此蕃かゝる心をもちやし事
言葉を進めさしとて云なり
○代官様再び時人ヽ引連て亂妨して五年をすゝ様ハ子相て
時よハ足を掛く女子をも引く有てさらハしく裏ゆみその
裏尓かゝちいとうしと挫
当家の旅籠屋のもとホウと云ふ者ハ髪を結ひもそふてを家
娘も大男此節往来ハかし大くさなり居りて人を好めり

附る事ハ誤也と云ときはポウ例(れい)の類と長有
此下と掬(むす)へ手をあて扱をすれハこなたより手を重ね
て物を時ポウ又共ハ手乃上へあり手を戴せる時も手を
ひろけて支ゆるをなす也
神佛此依あるものをポウといひそれに仕へ出家の振舞
者をポウと云糯粃をポウラといふ同し振舞詞そなの
本ハすへて表ひたりのを云之されハ此字の詞ハ和なく
覚え対さるましとそ教誠の詞を宣者ら申付ら
一再を君も分ちに天地山川人倫生類衣食器械云語を

つさしては分ちてあまねく書集めたるものなるかあれとも
しるしのおきすしとおひものに一体掛図とかの字とハ詞の素ひ
さまいとしかはりて一字を二字にかきされハ大事なること
うるしあるしても総名聲の外此切所もいかにて字の
おほ首字をとりてこうれと重者らいふをあらしく唆
うらとハいひて書へりされハ字も語でも何かれと
[illegible]取捨之然